

# アジアパシフィックラウンドテーブル

Executive Committee Member APLFD Japan chapter  
Asia Senior Researcher of The Institute for Global Strategy

埴淵 久志

タイトル 自由、民主主義、法の支配。

様々な政治体制は何が違うのか？アリストテレスによれば、暴君が君主制の倒錯であり、寡頭制が貴族制の倒錯であるように、モボクラシーはデモクラシーの倒錯であるという。意外なことに、ギリシャの偉大な哲学者プラトンやアリストテレスは、デモクラシーに否定的である。プラトンは徳のある哲学的な王である君主制が最も優れた政治体制であると考えた。アリストテレスは、公明正大で徳のある少数の指導者が最高の指導者だと考えた。彼らは、デモクラシーがモボクラシーになる運命にあることを知っていた。では、民主主義と社会主義は何が違うのか。

それは資本主義と深く関わっている。民主主義は理論的には社会主義の構成要素です。社会主義者は、生産手段を所有しないプロレタリア労働者である被抑圧階級の平等と権利拡大を提唱しています。この階級は、平等、人権、自由の民主主義を提唱する社会主義者の大多数である。しかし、民主主義と社会主義が一緒になると、必ず共産主義になる。社会主義と共産主義はどこが違うのか？共産主義は資本主義の最終段階と言われています。これらの政治体制はどのように変化していくのでしょうか？

資本家は常に労働者を搾取する。特にイギリスやフランスの産業革命の初期は、あまりにもひどい環境だったので、サン＝シモンやロバート・オーウェンなどのキリスト教徒は、ブルジョアとプロレタリアを抑制するために、よりよい環境を作り、労働組合を設立して、階級闘争のない産業社会を改革しようとした。しかし、それは無駄であった。マルクスとエンゲルスは彼らの夢を非現実的だと考え、彼らをユートピア的理想主義者と呼んだ。

18世紀、民主主義論を唱えたジャン＝ジャック・ルソーは、一般意志(善意や公共的価値を意味する)を持った市民は、自らを律し、国家と共に治めることができるとした。一般意志(善意と公共的価値観のこと)を持つ市民は、自らを律し、国家と共に律することができる。モンtesキーは、そんな奇跡的な市民がいると信じている指導者がいるとしたら、それは指導者としての資格がない、と一笑に付した。人間には罪があり、生まれながらにして悪質な性質がある。『君主論』を書いたマキャベリや、偉大な軍事指導者でありながら人間は生来悪であるという説を信じた中国のリアリスト韓非子も、彼らの理想論を一笑に付したのではないだろうか。実際、一般意志説とはいえ、公共的な価値観や善意による平和や自由、人権は社会を変えなかった。それに対して、あのような血みどろのフランス革命が起こったのである。

今日のアメリカ民主主義の状況を見てみよう。アメリカへの信頼が失われたためです。アメリカはもはや、リベラル・デモクラシー

のチャンピオンではなく、堕落したリベラリズムの最悪の例になってしまったかもしれない。一般に自由とは、失敗する自由、銃を持つ自由、異性・同性を問わず恋愛をする自由などである。少なくとも秩序を優先するための道徳や倫理や規範がなければ、個人の自由や人権や平等は一向に存在し得ないのである。普遍的な法の支配が必要なのです。自由主義、資本主義、民主主義、社会主義など、平等、自由、繁栄、人権を求める政治体制はすべて、人々が公共の価値観と責任をもって善意を持ち、法律や神の靈的法、つまり戒律のようなものを守るという前提に立っている。しかし、現代では、啓蒙主義の高まりにより、合理主義や科学的実証主義に基づく信仰や思考が主流となり、人々は無神論や唯物論に走るようになりました。このような流れの中で、地主や資本家の弾圧のもとで自由と平等、人権に飢えていた人々に特に広まったのがマルクス主義です。本来、すべての人が神の子として創造された以上、自由と平等と人間の尊厳は与えられる。しかし、共産主義の理論と動機には、資本家に対する恨みと嫉妬がある。さらに悪いことに、共産主義理論は、ロシアや中国、北朝鮮やカンボジアなどの共産主義革命の歴史が証明しているように、暴力で社会を変えなければならぬほど過激なものなのです。共産主義の浸透をどう防ぐか？今日の共産主義の戦略とは何か？

共産主義の精神的、文化的な無言の侵入をいくつか指摘しておこう。マルクス・レーニン主義革命がロシアを除いて失敗したため、共産主義はフランクフルト学派による別の戦略を採用した。暴力

的な革命の代わりに、より知的で文化的な革命が追求された。伝統と文化、そして家族制度を破壊する。長い歴史の中で、私たちは家族や部族、国家といった共同体なしには生きていけないし、それによって自分たちのアイデンティティを確保することができる。民主主義へのもう一つの脅威は、大手メディアによるテレビや新聞のプロパガンダとフェイクニュースである。世界で起こっていることの真実の姿を見ることができない。特にインターネットによるアダルトサイトが、若者の魂を蝕み、性欲を加速させています。その意味で、技術革新の前に宗教改革が必要であり、AIや神や靈的世界を否定する無神論に支配されることは、真の心の平安は得られない。精神的な自由だけが、私たちの真の自由を解放し、共産主義の唯物論と無神論を克服することができるのです。

マルクス主義が世界に蔓延したのは、宗教に対する失望が原因である。中世には天動説や魔女狩り、バチカン崩壊などの非理性的な信仰が、知的な人々をより合理的で科学的な思考に駆り立てた。実は、マルクス主義の理論は、3つの基本的な考え方で一見科学的に見える。ヘーゲルスの弁証法的唯物論、史的唯物論、フォイエルバッハの唯物論。その理論が偽物であることは、量子物理学の発展などで証明されているはずです。人間は、自然界と同じように、常に真理を追求する。形而上学の世界では宗教、現象学の世界では科学の両側面を通して。しかし、入隊以来、今日に至るまで、私たちは脳だけで考える傾向がある。私たちは心と体を持っているので、物理的な世界と精神的な世界の間でバランスを取りながら

物事を考えています。科学と宗教の原点であるヘレニズムとヘブライズムもそうである。本来、自然神学は自然哲学に、そして自然科学に発展していくものであり、それは同じライン上にあるはずだった。実際、ニュートンやコペルニクスは敬虔なキリスト教徒であり、物理学や天体観測を通じて真理と神を探求していたのである。同様に、民主主義や自由の根源も、この2つの原点にある。アインシュタインは、「科学なき宗教は不自由であり、宗教なき科学は盲目である」と言いました。

今世紀中には、量子力学の発展により、死後の生命や魂の世界の存在が科学的に合理的に明らかにされると思います。

そうなれば、私たちの価値観や生き方は、思想や哲学、政治体制も含めて、大きく変わるでしょう。

なぜなら、自分がしたことが結果として反映される「因果律」を実感できるからです。

自分が何をしたのか、何を考えているのか、誰が見ても、知っていても。本当に、サン=シモンやロバート・オーウェンが夢見たユートピア思想の社会、真の自由と民主主義、平等と相互繁栄は、神の愛のもとに科学と宗教が融合することによって、もうすぐ実現されるのです。

ご清聴ありがとうございました。